

付記

私の周りにデザインはいつもあった。ただ、気がつくまでに時間がかかった。正確に言えば、うすうすは気がついてはいたが、深く気づかないようにしていた。そうすることが研究を推し進めると当初は考えたからであった。しかし、結果として、そのために遠回りをしてしまった。

昭和63年(1988年)は昭和最後の年で、修士論文を書いていた。それは本研究の一部になっている。出来上がり間近の忙しいところに、友人の一人がある本を持って我が家を訪れた。彼はデザイン専攻の学生であった。私の周りにデザイナーを志すものは多かったのである。「この本について教えてほしい」と差し出された本は英書で、心理学者の書いた本であると言う。普段は英書など読まぬのに、なぜが相当に入れ込んでいるように見えた。

著者はノーマンと書かれてあったが、情けないことに、有名なノーマン(Norman, D)だとは思わなかった。なぜなら、彼がそれまでに書いたものとは天地ほど違っていたし、内容があくまでも「デザイン」についての本だったからである。私には、あくまでもノーマンと同名の風変わりな心理学者が書いた本に見えた。そう見えたから、知らない自分を恥じることはなかったし、正当な評価を受けていない本だと思ったままに答えた。

その「奇妙なデザインの本」を前に置きながら、修士論文の執筆で最も忙しい時期に、彼とこれまた奇妙な議論を戦わせたことを思い出す。私は当時から本研究で用いたような絵画配列課題を使った実験をしてい

た。その研究分野はかなりオーソドックスなものであり、ピアジェ理論の影響を強く受けていた(内容については本文参照)。議論の展開から、デザイナーの彼に、実験で用いた絵画を見せたところ、絵画のデザインが悪い、という。デザインを良くすれば、幼児でも簡単にできると、本当に腹の立つことを言う。

デザインを変えれば、絵画配列課題の成績が変わるなどと言う者は、当時はいなかった。忙しい時期に、風変わりな英書をいきなり持ち込み、知った風に語る仕草は、気持ちの良いものではなかった。だから、彼が帰った後は、気持ちよく、論文に没頭したことを覚えている。ただ一つ気がかりな点を残しながら…。

気がかりな点というのは、これとは全く違った文脈での話である。修士論文の執筆に先立つ数ヶ月前に、こんなことがあった。大学の図書館で、修士論文について参考文献の検索をしていた。すでに述べたように、絵画配列課題を用いた時間的系列化について研究しようと考えていたが、この研究分野では、当時、絵画に描かれた中身がどれくらい日常性の高い内容であるかが重要な要因になると言われていた。私は、図書館の端末を前に、「everyday」で検索できる本を探してみようと思ったわけである。

検索できた洋書は2冊しかなかった。認知の日常性が問われ出した頃に、大学が保管する図書で「日常性」をキーワードに検索できた洋書は2冊しかなく、依拠すべき洋書が少ないことに安堵したことを覚えている。その1冊は、ネルソンの著書(Nelson, 1986)であり、修士論文で引用させていただいたものである。もう1冊は、ただの「デザインの本」だった。これら2冊を手にとって、「デザインの本」は書棚に戻した。もちろん、この本は、「The psychology of everyday things」(Noman,

1988) だったわけである。しかし、その頃は気づかなかった。

年号が平成に変わり、修士号を授与されてからは、以前にもまして、私は私生活でデザイン活動に身を置く機会が増えた。妙に聞こえるかもしれないが、「以前にもまして」というのは、それ以前から、生活の糧としてデザイン活動をしていたからである。これは研究とは全く無関係な次元の話であった。単に、生活を営むために必要だったからである。大学院に籍を置きながら、デザインで生計を立てる学生など聞いたこともない。他の学生はもっと違ったやり方を考えたに違いない。ただ作ることが好きだったからだと思う。とにかく、今でも高いレベルと自他に誇れるデザインをさせていただいていた。

デザインの現場は容赦がない。「空論を垂れる暇があるなら、つくってみろ」というムードがある。ムードだけでなく、そんな声も飛ぶ。そんな声を聞くと、「頭の中」で、私は認知心理学のテキストを開いて、関係する原理・原則を探したことを覚えている。しかし、「注意を引くにはどんなロゴを使えば良いのか」、「分からせるにはどんなレイアウトが効果的か」、などと聞かれても、答えることは全くできなかった。とは言え、私は、デザイナーが夜を徹して熱く激しく語る言葉に羨望を覚えた。そして、何よりも、つくる人は偉いと単純に思った。つくることは生きていることの証であるからである。そして、今でもその考えは何一つ変わらない。

もしかすると、この頃から、問題が一つになり始めていたのかも知れない。デザイナーの叱咤する声は、私にとって確かに刺激的であった。しかし、デザイン活動に一層のめり込むことになるにつれて、デザイナーが語る声の中に、「偽り」が聞こえるようになった。それは、つくることを重んじれば当然の帰結である。デザイナーの「怠慢」が聞こえる

ようになったと言ってもよい。デザイナーは何を怠けているのか？

それは詰まるところ、誰のためにデザインしているか、という問題であった。デザイナーは自分のためにデザインすることはあっても、受け手やユーザのためにデザインしない。正確に言うなら、そもそも受け手やユーザのためにデザインはできない。デザイナーは、自分の思いこみの上につくり上げた「受け手」や「ユーザ」のためにデザインはできる。しかし、悲しいかな、これは現実のものとは決定的に違っている。

それを証拠に、われわれの周りを見渡しても、「分かりにくい」デザインや「使いにくい」デザインが氾濫している。それならまだしも、デザインと人間との適合性に破綻をきたしたものさえある。例えば、われわれにとって最も身近なはずの住居が、デザインのまずさから、住み手の安全を脅かし、結果として凶器と化し、安全が損なわれることにもなる。これは、住居内事故の件数が毎年 6000 件から 7000 件と多くみられる現状から知らされるのである（吉田, 1993）。

何かをデザインしたいなら、それは誰かのためにすることになる。意図してデザインした機能を誰かに伝えたいなら、受け取る誰かがその機能を受け取ったかどうかを知るべきであり、受け取れるようにつくることがデザイナーたる者の責務である。まして、表面的な見栄えの良さと引き替えに、デザインと人間の適合性を意識的に破綻させ、受け手やユーザの安全を脅かすようでは、デザイナーの風上にも置けない。これは受け手やユーザの率直な願いである。

以上のような遠回りを経て、ようやく本論文は書かれることになった。いまここに、この論文が一つの形をなしたことを見るにつけて、ここにたどり着くように導いて下さったたくさんの方々の数限りない励ましにただ頭の下がる思いがする。しかし、同時に、課題を残したままの本論

文が頂いたたくさんの励ましに十分報いるものではないことを思うにつけて、かたじけなさが身にしみる。本研究に対していただいたご意見やご批判を、今後の研究に生かしていきたいと思う。

論文の執筆にあたっては、筑波大学教授杉原一昭先生からの強い勧めがあつてのことである。先生には研究の当初から力強く励まして下さいましたこと、心より御礼を申し上げます。筑波大学教授海保博之先生には研究と実践を結びつける有意義なご教示をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。また、有益なご助言をいただきました筑波大学助教授茂呂雄二先生、立命館大学教授松田隆夫先生、立命館大学教授高木和子先生、文教大学助教授池田進一先生、メディア教育開発センター助教授高橋秀明先生、筑波大学技官青山征彦氏に御礼を申し上げます。

なお、本研究は、研究会やシンポジウムなどで、たくさんの方達との議論から生まれたと言うこともできます。本来ならば、こうした方々のお名前をお一人お一人あげて、感謝の意を表すべきことではありますが、あまりにも多数にのぼりますので、心の中で感謝させていただくにとどめざるを得ません。暖かいご助言を賜ったことに御礼を申し上げます。

また、研究の趣旨をご理解いただき、ご無理をきいて頂き、調査や実験にご協力を賜った藤陰幼稚園（石川県金沢市）ならびに石下幼稚園（茨城県石下町）の園の方々には心より御礼申し上げます。

最後に、本論文をまとめるにあたって惜しみなく支えてくれた最愛の家族御一同に返す返すの御礼を心から申し上げます。

平成 11 年秋

山本 博樹